

シンポジウム趣旨説明

第67回日本図書館情報学会研究大会シンポジウム
「デジタルアーカイブと図書館」
(2019年10月20日 龍谷大学大宮校舎)

古賀 崇

(シンポジウム コーディネータ・司会/天理大学)

趣旨説明での内容

- 「デジタルアーカイブ」の定義と、日本での実情
- 日本の実情を示す主要著作
- デジタルアーカイブが図書館と図書館情報学にもたらし得るもの
- 今回のシンポジウムについて

「デジタルアーカイブ」の定義と、 日本での実情

定義：実際にはあいまい！

• Kate Theimerによる定義

- (1) ボーン・デジタルの記録 (records) の集積
- (2) デジタル化された資料の集積 (コレクション) に対してアクセスを提供するウェブサイト
- (3) ある事柄についての、さまざまな種類のデジタル化情報を扱うウェブサイト (例：テキスト情報と画像資料が混在したもの)
- (4) ウェブ上の「参加型」コレクション (利用者からの資料提供に依拠するもの。“participatory archives (参加型アーカイブズ)”とも)

出典：Encyclopedia of Archival Science (Rowman & Littlefield, 2015)

関連：古賀崇「「デジタル・アーカイブ」の多様化をめぐる動向：日本と海外の概念を比較して」『アート・ドキュメンテーション研究』(24), 2017.

日本での実情(1)：1990年代のインターネット草創期の活動と挫折

- 月尾嘉男氏の提唱 = 造語としてのデジタルアーカイブ：「有形・無形の文化資産をデジタル情報の形で記録し、その情報をデータベース化して保管し、随時閲覧・鑑賞、情報ネットワークを利用して情報発信」
- デジタルアーカイブ推進協議会（JDAA）の創設（1996年）と解散（2005年）
- 構築されたデジタルアーカイブの放棄・消滅（この問題は今も続く）

日本での実情(2)：2010年代からの再活性化

- 各種団体の設立、「産・官・学・政」の連携によるデジタルアーカイブ推進
 - 文化資源戦略会議（2012年設立）：「アーカイブ立国宣言」（2014）、アーカイブサミット（第1回は2015年1月、第4回は2019年6月開催）
 - デジタルアーカイブ推進コンソーシアム（2017年設立）
 - デジタルアーカイブ学会（2017年設立）
 - デジタル文化資産推進議員連盟（2012年発足、超党派） → デジタルアーカイブ整備推進法（仮称）制定を目指す
 - 自民党・デジタルアーカイブジャパン構想推進議員連盟（2017年発足） など

日本での実情(2)：つづき

- 国家政策としての展開と成果
 - 総務省 知のデジタルアーカイブに関する研究会（2011年～2012年）
 - 内閣 知的財産戦略本部
 - デジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会、実務者協議会及びメタデータのオープン化等検討ワーキンググループ（2015年～2017年）
 - デジタルアーカイブジャパン推進委員会及び実務者検討委員会（2017年～）
 - デジタルアーカイブ産学官フォーラム（2017年～）

ジャパンサーチ

- 2019年2月に試験版を一般公開、正式公開は2020年内の予定
- 「国の分野横断統合ポータル」としての位置づけ
 - いわば、欧州“Europeana”、米国“Digital Public Library of America (DPLA)”の日本版
- サイトでの説明：“ジャパンサーチ（試験版）はデジタルアーカイブジャパン推進委員会・実務者検討委員会の方針のもと、さまざまな分野の機関の連携・協力により、国立国会図書館がシステムを運用しています。”

ジャパンサーチ (試験版)

<https://jpsearch.go.jp/>

JAPAN SEARCH
BETA

IM
ギャラリー

もう一つの東京オリンピック
昭和39(1964)年東京オリンピックの前に、昭和15(1940)年にも開催が決定しながら最終的に返上した東京オリンピックがあったことは、あまり知られていません。幻に終わった東京オリンピックを中心に、日本

奥の細道
江戸中期の俳諧師・松尾芭蕉による紀行文。全旅程は、奥羽・北陸・東海の600里にわたる。

日本植物誌
シーボルトが日本の植物をはじめてヨーロッパに紹介した植物図鑑

日本刀
機能性と美術性を兼ね備えた、日本固有の刀剣

名所江戸百景
江戸時代に
最晩年の江

日本の実情を示す主要著作

国家政策を重んじる側から

- 「アーカイブ立国宣言」編集委員会編『アーカイブ立国宣言：日本の文化資源を活かすために必要なこと』ポット出版, 2014.
- デジタル文化財創出機構『デジタル文化革命！：日本を再生する"文化力"』東京書籍, 2016.

草の根の取り組みを重んじる側から (現状の国家政策への批判も含め)

- 原田健一・水島久光編著『手と足と眼と耳：地域と映像アーカイブをめぐる実践と研究』学文社，2018.

日本での実践にまつわる到達点・手法・批評

- 岡田一祐『ネット文化資源の読み方・作り方：図書館・自治体・研究者必携ガイド』文学通信, 2019.
- 京都大学人文科学研究所・共同研究班「人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する」
（編）・永崎研宣（著）『日本の文化をデジタル世界に伝える』樹村房, 2019.

デジタルアーカイブが図書館と
図書館情報学にもたらし得るもの

「わかる！図書館情報学シリーズ」（当学会・研究委員会 編, 勉誠出版）とのかかわり

- 特に以下2巻とのつながりが深い？
 - 第2巻 『情報の評価とコレクション形成』（2015）
 - 第3巻 『メタデータとウェブサービス』（2016）

具体的論点の例(1)：メタデータ、あるいはデータモデルの再検討

- ジャパンサーチのような「分野横断統合ポータル」を構築するとして、各（異種）資料につき、どのように記述し、（メタ）データをつなぐか？
 - ダブリンコアとその拡張
 - 各メタデータ・スキーマをつなぐ「クロスウォーク」
 - 構造化：LOD・RDF対応
 - マッピング など…

具体的論点の例(2)：コレクションの拡張をめぐる検討

- IIFがもたらす役割：「バーチャルなコレクション」の認識
- LAM (MLA) の垣根を越えたコレクションの認識
- データベースからデータセットへ：個々のデータの維持と活用が求められる
 - 著作権法など法制度を考慮しつつ、データやデータベースをめぐる利用規約の検討も必要

具体的論点の例(3)：図書館そのものの役割・位置づけの再検討

- 図書館やそのコレクションが、他の館やコレクションとつながりつつ、いかに「新たな知」の発見と生成につながられるか

今回のシンポジウムについて

本日の講演者の方々

- 福島幸宏氏（東京大学大学院情報学環）：主に(3)について
- 川島隆徳氏（国立国会図書館）：ジャパンサーチを中心に、主に(1)について
- 西岡千文氏（京都大学附属図書館）：京都大学貴重資料デジタルアーカイブを中心に、主に(2)について

各発表を踏まえての討議事項

<1> デジタルアーカイブの利用規約（クリエイティブコモンズなど）

<2> デジタルアーカイブのデータモデル

<3> デジタルアーカイブを踏まえての、図書館等の活動に関する評価